

追悼

## 鈴木康之さんを偲ぶ

島 蘭 進

鈴木康之さんは東京大学文学部の宗教学宗教史学科を卒業し、さらに大学院に進んで研究を進められた。この間、私は鈴木さんと同期で学びをともにした。鈴木さんと初めてお話したのは、一九七〇年の春頃だったと思う。私は理系から一年留年して文学部に進学することになり、駒場キャンパスで文学部進学者たち（多くはもと文科三類生）と同じクラスで授業を受けるようになったのだが、ほとんど知り合いがいなかった。他方、鈴木さんは教養学部を留年しておられ、文科三類からの進学とはいえ同級生が近くにいなかったと思う。ともに友だちが少なかったこともあり、宗教学に進学する数少ない仲間でもあったから、すぐに親しくなった。当時の宗教学進学者は毎年、三、四人ほどだった。

体育の授業でテニスのクラスをとりダブルスを組んだりした。また、脇本平也先生の宗教学説史の授業をともにとったりもした。鈴木さんはいつも親しく接してくれて、よそ者意識のあった私にはありがたい存在だった。大学に入った頃は、わずかな年齢の差や社会経験の違いがずいぶん気になるものだ。鈴木さんはわ

ずかな年の差とはいえ先輩という感覚が私にはあって、遠慮があった。鈴木さんはよくテレながら、自分も余分に年をとっていると言っていた。しかし、鈴木さんと接していて、先輩風を吹かされたということは一度もなかった。

鈴木さんには、東大生的、あるいは優等生的な偉そうな感じがまったくないので私にとっては不思議な存在だった。本郷に進学してからも、私は鈴木さんの存在を頼もしく感じていた。どんな時にも鈴木さんがそこにいると私もそこにいいと感じるというように、安心感を与えてくれるのは、鈴木さんの身についた謙虚さによるものだろう。

大学院での鈴木さんは、やや居心地が悪かったかもしれない。鈴木さんは杉浦重剛の研究に取り組んでいたが、杉浦重剛がどのような意味で研究に値する存在なのか、当時の関係者にはよくわからなかったのではない。儒学の影響が強い学者なので倫理学の研究対象としては重要かもしれない。しかし、宗教学の研究対象としてどれほどの意義があるのか。当時の宗教学研究室の先生方にも大学院生にもそのように思われていたのではなかったか。

今でも行われているのだが、週に一度、大学院生が自らの研究テーマについて順番に発表していく「水曜ゼミ」（今は木曜ゼミ）というものがある。そこで鈴木さんが杉浦重剛について報告したとき、ある先生がたいへん厳しい批評を述べられたことがある。批評の内容は覚えていないのだが、宗教学にとってこの研究がどういう意味があるのか明確にせよといった内容ではなかったか。それは私などもギクリと驚くような内容のものだった。その折の鈴木さんの反応は残念そうではあったが、強く抗ったり感情を表に露わにしたりということとはまったくなかった。一つには杉浦重剛研究の意義に強い確信をもっていたからであろう。ま

た、宗教学の立場からの取り組みということについても自らの仕事を意義を疑っていなかったのだろう。そしてさらに、彼が身につけようとしていた「最高道徳」のあり方からも、そのような態度が自然だったのではないかと思われる。

鈴木さんが亡くなった後、モラロジ―研究所の竹内啓二さんをお願いして、鈴木さんが書かれたものをまとめて送っていただいた。それらを通読して、私は鈴木さんにとって宗教学がいかに重い意義を持っていたか、あらためて理解を深めることができた。大学院を終えた後も、鈴木さんは宗教学とモラロジ―研究を関連づけて進めていかれたことがよくわかる。それはたいへん地味な形で表現されており、宗教学研究でそのお仕事の意義を知っていた人はほとんどいないのではないかと思う。しかし、そこには宗教学的に見て、なかなか意義深い試みがなされているように思われるのだ。

杉浦重剛研究をまとめられた後の鈴木さんの研究では、「宗教と道徳の関係」とか「神の人格性」についてというテーマが重きをなしている。また、天理教の宗教思想の特徴を問うたお仕事もある。それらは、廣池九郎の思想を明らかにしながら、その内容の現代的な意義を示そうとする問題意識に根差している。そしてまた、モラロジ―の宗教性を見定めようとする関心が貫かれている。鈴木さんのそうした問いかけが、そのお仕事の太い骨格をなしていることが理解できる。私はモラロジ―研究に疎いので、モラロジ―研究の中でのお仕事の位置については分からないが、おそらく今述べてきたような特徴は、モラロジ―研究においても独自の位置を占めるものではないかと想像する。

現代日本の若者の間では、宗教への不信感はますます深まっている。だが、鈴木さんには既成宗教の排他性を超えるはずの「最高道徳」においても、宗教性が重い意義をもっているという確信があった。その場

合、なお重要な意義をもつ宗教性とは何かを明らかにしていく作業は、宗教学の基礎がないと容易ではない。鈴木さんは鈴木さんでなくてはなしえない、その課題をきわめて堅実に、かつ的確に進めていかれたのだろう。東大の宗教学科で学んでいた時から、一貫してその問題意識をもち続けていかれたに違いない。

東大の大学院を終えて、鈴木さんはモラロジー研究所に進まれた。私はその後、筑波大学、次いで東京外国語大学に職を得、そして一九八七年に母校の東京大学で教鞭をとることになった。その間も、鈴木さんは折にふれて交流があった。私は博士課程進学後に天理教研究に取り組むようになり、その文脈で廣池千九郎にも関心をもった。また、修養道徳運動としてのモラロジー運動にも研究上の関心をもった。韓国人の留学生が修士論文でモラロジー研究に取り組むのを指導したりもした。そうした折に、鈴木さんに教えを請うことが何度かあったが、いつも親切にご指導いただいた。モラロジーにもっと親しむためにも、また鈴木さんのお考えをよく理解するためにも、鈴木さんがお元気な間に真剣に研究に取り組んでおくのだったと悔やまれてならない。

鈴木さんががんの闘病生活を続けておられることを知ったのは、二〇〇八年の年賀状だが、おって三月二一日、鈴木さんからモラロジー研究所道徳科学研究センターでの講演のお誘いをいただいた。その文面には、「胃ガンの腹膜転移第四期、別に食道にも独立のガンができていて、そちらは第二期、最悪の場合は本年九月ごろまでの余命、と告知されております」とあり、衝撃を受けた。どのような言葉をお返ししてよいのか分からず、ちよほど手術を終えたばかりだった私の母のことを記し、最近の医師は実際よりも厳しい見込みを述べる傾向があるというようなことを記した。ともあれ、鈴木さんは自分の病状についてはよく自覚しておられたはずで、その上で、私に親しく接することのできるお別れの機会を作ってくださいだったのだと思

う。ありがたいことだ。

講演会当日の六月二日には、昼食をともしご自身の病状やご家族のことなどがうかがうことができた。ご家族と貴重な日々を過ごされていることについてもうかがった。私がかがった限りでは、厳しい病状にもかかわらず、明るく落ち着いて、意義深い最後の日々を送られたようであった。講演会でも意義深い質問が多く、楽しく充実した時間を過ごすことができた。

また、講演会の前後、しばしば連絡を取り合い、雑談のようにして近況を話し合う機会をもつことができた。そして、鈴木さんからはいつも私の母の病状を訪ね、病状の好転を願う気持ちを分かちあっていた。私はその前後、初めて次々に二人の孫というものをもつことになった。講演会の三日前に初孫が生まれたので、私はすでに孫のことでは経験豊かな鈴木さんに勢い込んでその話をした。鈴木さんから得た助言の一つは、孫から「ジージ」とよばれるような場合には、「ジジ」と響かず、「ジージ」となるようにうまくしつけるのがよいとのことだった。何という思いやりだろう。

房総の旅先で鈴木さんの体調が悪化し、三月二四日に逝去されたとの報は、予想されたこととはいえないへん残念だった。「まだまだ早いよ」と言いたかった。苦しそうな様子、だるそうな様子には一度も接することがなかったのだから、なおさらその気持ちは強い。六月一四日に母が亡くなり、一八日に孫が一歳の誕生日を迎えた。もう鈴木さんにその話をすることはできない。今、私はようやく言葉が出かかっている孫に向かって、「ジージだよ」「ジージだよ」と繰り返している。そしてその度にベレー帽をかぶったその日の鈴木さんのお顔が眼前に浮かんでくる。